

吉屋信子の小説にみる大正末～昭和戦前期の女中像

— 『三つの花』『良人の貞操』を中心に —

Images of Housemaids from the End of the Taisho Era to the Pre-war Years of the Showa Era as Depicted in the Novels of Nobuko Yoshiya
With a focus on “Mittsu no Hana [Three Flowers]” and “Otto no Teiso [A Husband’s Chastity]”

清水 美知子*
Michiko SHIMIZU

【抄録】

本稿は、大正半ばから昭和の高度成長期まで、半世紀以上にわたり活躍した作家、吉屋信子の小説を資料として、都市中間層の家庭における女中像について考察したものである。吉屋は少女小説、大衆小説の分野で多数の作品を残したが、ここではテキストとして、雑誌・新聞に連載された長編小説、『三つの花』（「少女倶楽部」1926年）と『良人の貞操』（「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」1936-37年）をとりあげる。

2つの小説に共通して描かれているのは、主婦と女中との温情的な主従関係である。それは、小説の読者層、すなわち女中を使う人びとの理想とする女中像を反映したものと見える。また、“女中の廃止”や“女中の夜学”など当時、社会的に関心の高かった話題も、小説のなかでとりあげられている。小説は時代と社会をうつしだす鏡であることが、改めて明らかになった。

Abstract

This work discusses the images of housemaids in homes of the urban middle class based on the novels by Nobuko Yoshiya, a novelist who was active for over half a century from the latter part of the Taisho Era until the period of high economic growth in the Showa Era. Yoshiya left numerous works in the areas of stories for young girls and popular fiction, but the texts examined here are two full-length novels in magazines or newspapers: “Mittsu no Hana [Three Flowers]” (Shojo Kurabu, 1926) and “Otto no Teiso [A Husband’s Chastity]” (Tokyo-Nichinichi-Shimbun, Osaka-Mainichi-Shimbun, 1936-37).

These two novels both depict a cordial master and servant relationship between mistresses and their housemaids. These depictions reflected the readership of the novels, i.e. the perceptions of women employing housemaids (images of ideal housemaids). In addition,

* 関西国際大学人間科学部

both novels also deal with social issues of the time like “disuse of housemaids” and “night school attended by housemaids.”

1. 近・現代日本の小説と女中

1.1 『小さなうち』にみる女中

2010（平成22）年7月15日、第143回直木三十五賞の選考結果が発表された。受賞作は中島京子『小さなうち』（文藝春秋社、2010年5月刊）¹⁾。主人公は1930（昭和5）年、女中奉公のために12歳で山形から上京した布宮タキ。物語は、晩年をひとりで暮らすタキが、終戦直前まで仕えたサラリーマン家庭、平井家（夫婦と子ども一人）での出来事を手記で綴る、というかたちをとって進む。

『小さなうち』が秀逸なのは、丹念な取材と精密な時代考証にもとづき、昭和戦前期の東京における新中間層の生活、とくに主婦を中心とした家庭生活が、女中タキの目を通してリアルに、いきいきと描かれている点であろう²⁾。

たとえば、平井家が新築の赤い三角屋根の文化住宅に引っ越した1935（昭和10）年には、ひとり応接間でくつろぐ主婦、時子の様子が、次のように語られている。「奥様は染付けに金の縁取りある、香蘭社のティーカップにひとりぶんのお茶を注いでいた。それは、最初の嫁入りのときに伯母様から贈られた一そろいだそうで、ずいぶん長いことしまいこんで使っていなかったけれども、この家にはこれが似合うわねと、その後も何度もひとりきりで家にいるときに、その後も何度も聞かされたものだった」³⁾。

また、2年後の1937（昭和12）年の平井家の年末風景については、以下のような描写がある。「奥様は戦勝セールへお出かけになり、綸子の訪問着を誂えられた。三越の呉服部の懇意の方に、なんとか大晦日までに仕立てて届けてくれるように頼まれたそうだ。それ以外にも、旦那様のワイシャツや肌着など、買いおかなければならないものがたくさんあるから、奥様は外回りのお仕事、わたしは内向きのことに専念する。(中略)クリスマスイブにはまた、奥様のご実家からおじいさま、おばあさまがみえて、ぼっちゃんを中心に楽しいクリスマス会をなさった」⁴⁾。

1937年といえば、7月に廬溝橋事件が勃発し、日中戦争が始まった年にあたる。引用文の「戦勝セール」という言葉もそれを反映したものであろう。しかし、平井家の日常風景には、戦争の影はみられない。少なくとも太平洋戦争が始まるまでは、都市部にはハイカラな文化が存在し、人びとがそれを享受していたことを、この小説は教えてくれる。

さらに、『小さなうち』のリアルな描写は、家庭内外の情景にとどまらず、人間関係、とくに主婦と女中との関係にもおよぶ。平井家の主婦である時子と女中タキは、「友達のようにも、姉妹のようにも、恋人同士のようにすら」⁵⁾見える良好な関係にある。とはいうものの、主婦である時子と女中タキとのあいだには厳然たる区別も存在する。使いから帰ったばかりのタキに、一人息子である恭一のお供を頼んだ時子が、到来物の饅頭を渡すシーンをあげておこう。

下がろうとする奥様は、頂き物の包みをさっと開けて饅頭を一つ取り出して懐紙に包み、「行って帰ってすぐじゃあ、あなたも疲れるでしょうから、甘いもの一つ、お部屋でいただいてからにしたら？ これ、おすそわけ。恭一を連れて外に出たら、ついでにお野菜を少し

買ってきてちょうだい。今日、お夕飯、鶏のシチュウにするから、にんじんと、蕪かなんか、適当にみつろってきてよ」とおっしゃった⁶⁾。

どんなに親しく、気持ちが通い合っている、奥様が使用人と一緒にお茶を飲むということはない。家族のようであって家族ではない間柄。昭和戦前期の家庭における主婦と女中の関係が、“饅頭のおすそわけ”という行為を通して浮き彫りになってくるのである。

1.2 小説に描かれた女中

『小さなうち』の著者である中島京子は、2009（平成21）年にも女中を主人公にした連作小説集『女中譚』（朝日新聞社刊）を発表している。「女中」をとりあげる理由について、中島はインタビューのなかで次のように述べている。

「女中とか家庭教師とか小間使いとか、家庭にふかく入り込むんだけど家族ではない人が語り手になっている小説が昔からあって、好きだったんです。それで自分でもやってみたいな、と思ったのが最初だったと思います。（中略）資料をさがすと、いろんな小説家が“女中小説”を書いているので面白くなってしまって、そういったもののパロディみたいな感じで書いたのが『女中譚』ですね⁷⁾。

中島も指摘するように、近代日本の文学作品の多くには、女中がひんばんに登場する。森鷗外、夏目漱石、志賀直哉、芥川龍之介、谷崎潤一郎、太宰治など、文豪と呼ばれる人を思いつくまにあげても、小説家は女中を書いている⁸⁾。

明治後半から大正初めにかけて活躍した夏目漱石をとりあげよう。たとえば、雑誌「ホトトギス」に発表された『吾輩は猫である』の主人公（＝猫）の飼い主は、妻から生活費が「今月はちょっと足りませんが……」と訴えられる暮らしの英語教師である。屋根には草が生え、塀は崩れかけ、垣根の向こうにいても話しが筒抜けになるような家に住みながら、女中を置いている。「朝日新聞」に連載された遺作『明暗』においても、所帯を持ったばかりで親からの援助がなくして生活に困るような新婚夫婦のもとに、住み込みの女中がいる設定である。

とりたてて豊かでもなさそうな人びとの家庭で女中が使われ、読者がそれを不思議とも思わずに受けとめていたのは、とりもなおさず当時、家事雑用に立ち働く女中の姿が日常ありふれた情景であったことを示すものであろう⁹⁾。だからこそ、近代日本の多くの小説には女中が描かれていたのである。

戦後に発表された小説においても、女中がしばしば登場する。主人公が女中である作品にかぎっても、由起しげ子『女中ッ子』（1954年）、源氏鶏太『青空娘』（1956-57年）、松本清張『熱い空気』（1962年）、石坂洋次郎『風と樹と空と』（1963年）、筒井康隆『家族八景』（1972年）など少なくない。いずれの作品も、のちに映画化ないしはテレビドラマ化され、好評をばくしたものであった¹⁰⁾。

女中が登場する小説を通して、それが書かれた時代の家庭生活や家庭内の人間関係、ひいては社会についてみていくことができないだろうか。

「文学というのは、しばしば、社会科学よりもむしろ同時代をつかまえる力をもっている。社会科学というものが、それぞれの方法論や理論でみずからをぎりぎり緊縛してしまっているのにたいして、文学は、自由な想像力を駆使して、時代と社会を生き生きとえがきだしてくれる」

という加藤秀俊の指摘¹¹⁾にもあるように、文学も時代と状況の産物にすぎず、それを生み出した時代と切り離して考えることはできない¹²⁾。

本稿ではその試みとして、1920年代半ばから30年代半ばに発表された吉屋信子の少女小説および新聞小説をとりあげる。小説に描かれた女中表象の分析を通して、当時の主婦と女中との関係や人びとが理想とする女中像について明らかにしたい。

2. 吉屋信子の少女小説、新聞小説

2.1 小説家・吉屋信子の略歴

吉屋信子の小説をとりあげる前に、まず、小説家としての経歴についてふれておきたい。

吉屋信子は1896(明治29)年1月、官吏の娘として新潟県に生まれた。きょうだいは、4人の兄に2人の弟(ひとは夭折)という男ばかり。両親ともに長州萩の藩士出身で、父・雄一は権威をふりかざす厳格な家父長、母・マサは忍従をもって横暴な父につかえる明治風の良妻賢母であったという¹³⁾。

吉屋は幼いころから本を読むことや文を書くことが好きで、栃木高等女学校に入学したころから「少女世界」「少女界」などの少女雑誌へ投稿していた。女学校を卒業した彼女は、唯一の理解者である3番目の兄・忠明を頼って上京し、文学の勉強をはじめた。1915(大正5)年、20歳のころである。

吉屋は投書家で終わることにもあきらまず、「良友」「幼年世界」などの児童雑誌に童話を書きはじめ、ついで雑誌「少女画報」編集部に『鈴蘭』という短編を投稿する(1916年)。この原稿が採用掲載されたうえに、編集部より花を象徴する短編小説の連載を依頼された。華麗典雅な文章で少女どうしの美しい交友や憧れを表現したこの連作小説『花物語』は、女学生たちから圧倒的な支持を受け、“少女小説”の代名詞的な人気作となった。『花物語』は1920(大正9)年に単行本化されて以来、“乙女のバイブル”¹⁴⁾として改版を重ねるロングセラーとなっている。

少女小説の作家として人気を得るいっぽうで吉屋は、1919(大正8)年、「大阪朝日新聞」の懸賞小説に応募して一等に当選、賞金2千円を獲得した¹⁵⁾。当選作『地の果てまで』は選考にあたった徳田秋声、幸田露伴から絶賛され、連載も好評をばくした。つづいて1921年、『海の極みまで』を同紙に発表、大衆小説の作家としての地位も確立した¹⁶⁾。

1923(大正12)年、「国民新聞」女性記者の山高しげりに同級生の門馬千代を紹介され、以後、門馬は生涯のパートナーとなる。大正末から始まった円本時代¹⁷⁾は、信子にも多額の印税をもたらした。1928年(昭和3)年、彼女はそれを元手に門馬とヨーロッパ旅行に出かける。1年間のパリ滞在は、吉屋信子の人生と文学の土壌を豊かにした。

帰国後は「主婦之友」「婦人倶楽部」などの女性雑誌に書き続けられるかたわら、少女雑誌にも精力的に小説を発表を続けていく。1933(昭和8)年から「婦人倶楽部」に『女の友情』を連載。女学校を卒業した三女性の強い友情と数奇な運命を描いて大変な評判作となり、連載完結を機に『吉屋信子全集』(全12巻、1935～36年、新潮社)が刊行される。つづいて1936(昭和11)年から翌37年にかけて「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載した『夫の貞操』も好評で、女性大衆小説の第一人者として目されるようになった。

その人気のなか、吉屋は雑誌「主婦之友」の専属作家となり、日中戦争開始(1937年)後は

上海などを慰問して同誌にルポルタージュを掲載。翌1938年には内閣情報部が派遣した従軍文士海軍班の一員として漢口へ趣き、その後も「主婦之友」特派員として満州、東南アジアを訪問している¹⁸⁾。

第二次世界大戦後の1951(昭和26)年、吉屋信子は「毎日新聞」連載の『安宅家の人々』において、知的障害者を描き新境地をひらく。いっぽうで、貧苦のなかの女性が凄絶な死を遂げる短編『鬼火』(「婦人公論」1951年)で第四回女流文学者賞を受賞している¹⁹⁾。

1960年代以降は、『自伝的女流文壇史』(中央公論社、1962年)、『私の見た人』(朝日新聞社、1963年)などの回想的評伝、救世軍の山室軍平の苦闘を扱ったルポルタージュ『ときの声』(1964-65年「読賣新聞」連載)を書くいっぽうで、『徳川の夫人たち』(1966年「朝日新聞夕刊」連載)、『女人平家』(1970-72年「週刊朝日」連載)といった、歴史小説の力作も発表した。1973(昭和48)年7月、結腸ガンのため77歳で逝去。なお、吉屋は生涯一度も結婚することはなかった。

吉屋信子は大正半ばより戦後の高度成長期まで、半世紀以上にわたり数多くの作品を発表し、多くのファンを得つづけた。彼女の小説の多くは、悲運に翻弄される女性を主人公としており、女どうしの助け合いや真摯に生きるヒロイン像は、女性読者からが熱狂的に支持された。しかし、大衆小説や少女小説の作家というイメージが強いこともあり、文壇的には恵まれず、文学賞にも縁がうすかったのである。

2.2 『三つの花』『良人の貞操』について

筆者が、吉屋信子の小説をとりあげる理由は三つある。第一に、雑誌や新聞を中心に活躍し、女性を主人公とし、家庭を舞台とする作品を数多く書いているからである。第二は、社会的な題材やその時代の先駆的なテーマ、とくに女性をめぐる問題が扱われているからである。第三は、主人公の女性が都市部の新中間層の出身であることが多く、作品のなかに女中がさり気なく登場するからである。

以下では、1920年代半ばから30年代半ば、すなわち、吉屋信子が30代から40代にかけての、もっとも気力充溢していたころに発表された小説のうち、『三つの花』と『良人の貞操』をとりあげる。まず、それぞれのストーリーと、作品の位置づけについてみておきたい。

(1) 少女小説『三つの花』1926年

『三つの花』は、吉屋信子30歳の少女小説で、しかも少女小説としては初の長編ものである。

『花物語』の成功により少女小説の作家としての地位を固めていた吉屋は、少女小説から離れ、「大人の小説の世界へ専心したい」²⁰⁾と願っていた。めざすは、清新な家庭小説。夫も妻も読者として共に楽しんで読み、関心をそそられる新時代の小説を書きたい、と考えていた。吉屋は『空の彼方へ』²¹⁾という長編の執筆にとりかかり、いっぽうで掲載してくれる雑誌や新聞をさがしはじめる。が、色よい返事はなかなか得られない。

そのような折に、吉屋のもとへ雑誌「少女倶楽部」編集部より長編小説の依頼が舞い込んだ。希望していた大人の小説でないが、少女小説の長編は、まだ挑戦していない分野である。そこで、もう執らぬと思った少女小説の筆を執って、「春からのひととせの間、又一心に書き出した」²²⁾のが『三つの花』である。掲載期間は1926(大正15)年4月～翌27(昭和2)年6月で、連載終了後に単行本として刊行された。挿絵の担当は田中良。大正風の豊雅な情趣、清楚な味わいが

ある絵である。

主人公である山内家の三姉妹について紹介しよう。長女の幾代は神戸女学院の5年生で17歳。上品で気高く、下級生からは「白百合の君」と呼ばれている。また、彼女には、現在大学に通う許嫁がいる。次女のみどりは同学院の3年生で16歳。姉にくらべ容貌は劣るが、勝ち気で才気ある性格である。花にたとえると「黄薔薇」。末っ子の幸子は小学6年生で、甘ったれだが人見知りせず誰からも好かれる快活な少女。たとえられた花は「紅椿」である。小説のタイトルとなった“三つの花”とは、タイプの異なる3人の主人公を示している。(図1)。

山内家は、三姉妹にくわえ神戸の高等商業学校の教授をつとめるクリスチャンの父、家庭的で優しい専業主婦の母という典型的な新中間層の家庭である。一家には、古くから奉公しているきよという住み込みの女中がいる。

『三つの花』は、父の誕生日を祝う山内家の幸せそうな情景描写からはじまる。冒頭の一部を引用しておきたい。



図1 山内家の三姉妹

出所：『三つの花』「少女倶楽部」1926年4月号

神戸の高等商業学校の教授で人格がすぐれた先生として生徒達に人望の有る山内文学士のお宅では毎年四月十日の宵に、日ごろ親しいお近づきの方達をお招きして奥様の康子夫人の心のこめられたお手料理の御馳走を差し上げる例になって居た。その四月十日という日は、学士の誕生日だったので、そのお祝いの為なので。

——今宵はその四月十日、山内家の洋風の広い客間は朝から花で飾られ、椅子をたくさん置きならべて午後三時からと招いてあるお客達の入来を待ち受けていた。その日の康子夫人の忙しさは言うまでもない、古くから奉公している女中のきよも、まめまめしく奥様に手伝ってお台所と客間の廊下をもう朝から七十九回行ったり来たりするという騒ぎ……忙しいのは此の二人ばかりではなく、此の二人の手助けをする三人の少女も又忙しかった²³⁾。

平和で温かい家庭は、父親の急死により調和を失う。一家は神戸の家をたたみ、亡き父の姉（伯母）のいる東京へ移り住む。伯母は富豪夫人ではあるが家庭的に不幸で、性格は偏狭で冷たいという物語中の憎まれ役である。みどりと幸子は転校するが、幾代は卒業まで寄宿舎にとどまり、家族は東京と神戸に分かれて住むことになる。幾代は女学校卒業後、上京して母妹と合流する。

新しい環境のなかで、山内家の人びとは、さまざまな運命に遭う。女学校卒業後に上京した長女の幾代は、窮迫していく一家を助けるために許嫁とも別れ、伯母がすすめる気乗りのしない縁談を承知せざるをえなくなる。次女のみどりは転校先の府立女学校でいじめを受けつつも、心の通い合う友を得る。第一志望の女子師範附属女学校の受験に失敗した三女の幸子は、入学した私

立女学校で不良グループに入り、退学を余儀なくされる。そして姉妹の母は、生活のために週5日、教会の経営する夜学校で働くが、心労が重なり病に倒れて入院する。

『三つの花』では、数々のトラブルに遭いながらも、母と三人の娘、それに女中のきよが助け合い、困難を乗り越えて希望を見いだしていくさまが描かれている。やがて物語はなだらかに大団団へ。俗悪とエゴの塊のようだった伯母は改心し、幸子の愛らしさ、みどりのけなげさ、幾代の優しさに心がほぐれる。母の病も快方にむかう。幸子は伯母一家の養女となり、幾代はかつての許嫁と婚約が成立する。

ストーリーそのものは零落した娘たちが支えあい、けなげに明るく生きていく、という少女小説の典型的パターンを踏襲している。が、長編小説ということもあって、映画、歌舞伎座、自動車など、大正末の社会風景が効果的に描かれており、モダンで洗練された印象を与える。

『三つの花』は読者にも好評をもって迎えられ、それは少女小説の筆を断とうとしていた吉屋にも大きな影響をおよぼした。1927年に公刊された単行本で、吉屋は以下のように語っている。

「或る親しい友達は、『三つの花』を読んでくれて私に忠告しました——『あなたは永遠の少女だ、一生少女小説をすてずにお書きなさい』と——私は、幾日も書斎に閉じこもって考え悩みました——そして、とうとう決心しました。私は大人の小説にも勿論勉強してまいります。しかし、少女の方の読物をもすぐれたものを書いて行くと！そして此の『三つの花』は、私の過去の少女小説の型を破って、或る変化を示したものだというのがよくわかりました。そうです、私は此の作を少女小説の^{エポック・メイキング}一転機として進んで行きましょう」²⁴⁾

少女小説も大人の小説も「同じ心持と努力」²⁵⁾で取り組んでいく、という決意表明がここには示されている。その後、吉屋は少女小説においても『暁の聖歌』(1929年)、『紅雀』(1930年)、『あの道この道』(1935年)など長編作を次々と発表していくのである。

(2) 新聞小説『夫の貞操』1936～37年

『良人の貞操』は、1936(昭和11)年秋から半年にわたり、「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」両紙において連載された長編小説である。吉屋信子は当時40歳。すでに、少女小説の分野では確固たる地位を築いていたものの、それでは満足していなかったらしい。彼女は、当時をふり返り次のように語っている。

「私は……ながい間、少女雑誌と婦人雑誌には身にあまる待遇で、よい舞台を与えられておりましたが、隴を得て蜀を望む欲望とでも申しましょうか、おいおいに新聞小説への烈しい熱情を、ひそかに抱くようになりました」²⁶⁾。

昭和に入ってから吉屋信子は、「報知新聞」(『理想の良人』1933年)や「読賣新聞」(『女の階級』1936年)などにも新聞小説を発表していた。そしてより購読者数の多い東日(東京日日新聞)や大毎(大阪毎日新聞)に書き、全国の老若男女を相手に挑んでみたい、と考えた。

チャンスは1936(昭和11)年早々に到来した。「東京日日新聞」朝刊小説の執筆候補者として吉屋があがっている、という情報が入ってきたのである。推薦者である同紙の学芸部長・阿部真之助から「次回の朝刊小説を御依頼したいから、御用意願う」という手紙が届いたのは、同年8月のこと。のちに吉屋は、そのときの気持ちについて「嬉しさのあまり、また散歩に飛び出して、うす紫の松虫草や、銀の穂のすすきの夕風に、そよぐ高原を、心もそらに歩きました」²⁷⁾と述べている。

1936（昭和11）年10月6日、『良人の貞操』連載がはじまった。挿絵は小林秀恒が担当した。主人公の水上邦子は、元逋信省官吏の娘で鎌倉に実家がある。彼女は女学校卒業後、上級学校への進学も考えたが、早く娘を結婚させたいという親の意向で、見合い結婚した。子どもはまだいない。夫は大学出の技師で、勤務先では若いながらも責任ある地位にいる。物語は夫と妻の朝食風景という、平凡な日常生活の描写からはじまる。1930年代半ばの新中間層の家庭生活の一端を示すものとして、少し長くなるが引用しておきたい。

お手製の白ネルの地裁袋の口に、針金を縫いつけた柄を持って、邦子は瀬戸引きの珈琲沸しからドクドクとその袋へ、ジャバとモカを半々にひいた粉を含んで、ドロリとしたのを注ぐと、袋のネル地に濾されたのが、チョコチョコと下の珈琲椀^{コーヒーカップ}に湯気を立てて溜まってゆく。やっと一杯になると、自分の分は後回しにして、牛乳入れと砂糖壺を揃えて、卓袱台に置いたとたん、向うの部屋から、「おい」と信也の呼ぶ声があった。婚約中と新婚後、しばらくは、「邦子さん」だったのが、「邦子」に変わり、四年後の今では、「おい」に下落した呼び声だった。（中略）

「このあいだ出したクリーニング出来て来ているかい？」

夏の麻の服の着更用の薄茶色の方を、先週洗濯屋へ出したのだった。

「え、もう来てますわ、でも、またあれお召しになるの？」

「うん」

ネクタイを結び終わった信也は、その服が出るのを待つ姿勢だった。

「だって、せっかく綺麗になって来たの、もったいないわ、もう夏もおしまいよ、御辛抱なさいよ、まだこれ、そんなに汚れてなんかいないじゃありませんか」

邦子は、信也が昨日まで着て出勤した白い麻の服を洋服掛からはずして突き付けるようにした。だが見向きもせず、「いいから、洗ったの出してくれ」と高圧的だった。

「おしゃれねえ、いったい誰にお見せになるの」

邦子は、いささか、ふくれて見せて、押入から、ちゃんとナフタリンまで入れて、いったん箱に収めた薄茶の夏服を取り出した。

「おい、むやみと小さく畳んじゃ駄目じゃないか、よけいな折目を付けて」

信也はズボンの中程に、横に畳目が付いたのを見て、舌打ちした。

「だって、来年までいらなと思ったんですもの——アイロンかけますわ、少し待って下さる？」

信也は、それには答えず、不機嫌に無言で、ぱっとそのズボンを畳に落とすと、邪慳に古い白地の方を引き取って着はじめた。

邦子は、その良人の様子を手持無沙汰で見っていたが、これもまた無言で茶の間へ引き返すと、火鉢の上のパンは、黒煙をあげていた。

「大変々々」

慌てて、取り上げて指先ではたいたが、片側が黒く焦げて、そっくり返り、ガリガリだった²⁸⁾。

不機嫌にふくれる夫、火鉢の上で黒煙を上げるトースト。この引用文のあとには、さらにコー

ヒーがまずいと文句を言い、靴が磨かれていないと行って舌打ちする夫・信也の姿が描かれる。出勤する夫を見送りながら、主婦という体裁のよい名が、実は万年女中に毛のはえた実在にすぎないような情けなさを感じる。

まるで隣家の食卓風景をどこかから盗み見て書いたのではないか、と思わせるほどのリアルな描写。一読するだけで、夫婦の勢力関係をうかがい知ることができる。吉屋信子は、大衆小説のなかで軽視されてきた“日常性”に着目した。日常茶飯事の出来事をエンターテインメントに組み直し、しかもそこに何らかの“意味”を持たせている。開巻劈頭、読者はこの若い夫婦から目が離せなくなるのである。

ところで、主人公の邦子には、加代という女学校時代の親友がいる。加代はもと深川の材木問屋の一人娘。関東大震災で両親を失い、財産も失い祖母に育てられ、百貨店の女店員として働いた経歴をもつ。邦子の紹介で夫・信也の従兄弟・民郎と結婚したが、民郎は事故により急死。未亡人となった加代は3歳の女兒・静江を伴って上京し、信也の口利きで彼の勤務する会社の事務員となる。信也の加代への同情の気持ちはしだいに愛情へと変わり、もともと信也に対して好意を抱いていた加代との距離はしだいに縮まる。そして二人は、不倫の関係に陥る。

幸福な妻として生きてきた邦子は、ある日思いがけなく信也と加代との関係を知る。夫と親友の二重の裏切りに遭遇した邦子は打ちのめされる。友情と嫉妬のあいだで苦悩したすえ、邦子は、加代と信也のあいだにできた子どもを引き取る。いっぽう、男との愛よりも、女どうしの友情を選んだ加代は身を引き、職業人として生きる決意を固める。が、加代は新たに登場した貿易商の準吉と結婚。親子3人、船でマニラに旅立つシーンで物語は終わる。

『良人の貞操』は、すでに結婚生活に入った男との女が、現実生活に根ざして醸し出す愛欲と三角関係を正面から取り上げ、女性のみならず男性側の情愛や煩悶も緻密に描いたという点で、当時としては画期的な作品であった。またこの作品は、男性（夫）の貞操を問うとともに、未亡人の貞操を描いたという点でも、世間の注目をあつめた²⁹⁾

異性関係で純潔を守ることは当時、おおむね女性に強いられた義務であり、男性はそこから自由であった。仮に妻が夫以外の男性と性的関係を持てば、世間から指弾されるのみならず、法律でも罰せられた。小説のなかでも、妻の邦子が「貴方——もし私がよその男の人と、そんな事になって、貴方を裏切ったとしたら、どうなさる？」と詰め寄るシーンが登場する。夫の信也は、しどろもどろに「そ、それは、お前姦通罪になるよ」と答える³⁰⁾。

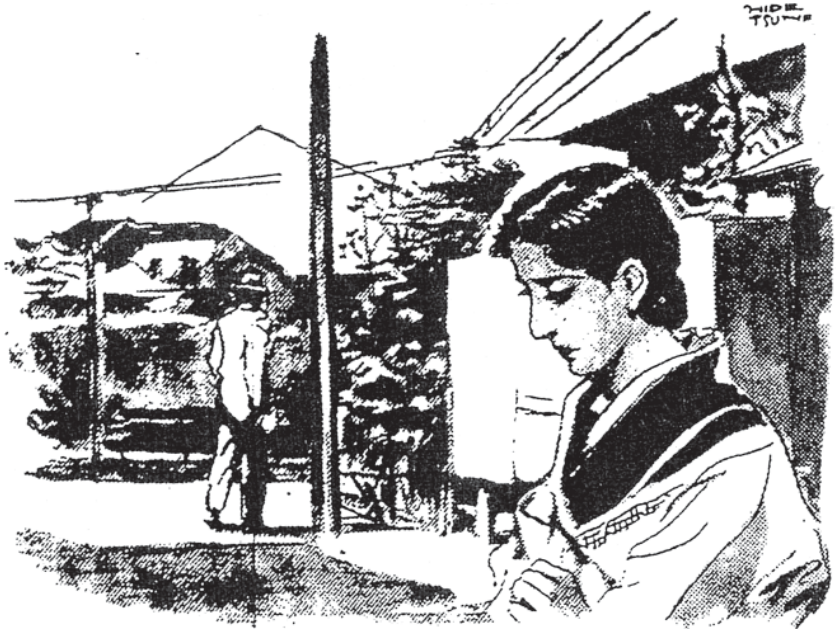


図2 夫を見送る邦子

出所：「大阪毎日新聞」1936年10月7日付朝刊

制度としてもまた社会通念のうえでも、“貞操”という言葉がもっぱら女性にのみの結びつけて考えられた時代に、“良人の貞操”をタイトルに冠して登場したのだから、人びとがどれほど瞳目したか、想像に難くない。『良人の貞操』は一大ブームを巻き起こし、小説が完結した1937(昭和12)年の演芸界は、芝居に映画に「良人の貞操」一色に塗りつぶされた³¹⁾。そして、この作品の成功により、吉屋は一躍、流行作家となったのである。

3. 『三つの花』『良人の貞操』にみる女中像

吉屋信子の小説は、その時代の中流階層、とくにアッパー・ミドルの女性を主人公にすることが多い。本稿でとりあげる2つの小説においても、主人公の父親もしくは夫の職業はそれぞれ、“近く心理学の博士論文を出す予定の高等商業学校教授”“石鹸をつくる会社の研究所に勤務する大学出の技師”で、親類や知人も実業家や官吏、大学教授、医師など、生活に困らない階層の人びとである。こうした中流階層の生活を描いた小説には、必ずといってよいほど女中が登場する。以下では、『三つの花』『良人の貞操』に描かれた女中像についてみていきたい。

3.1 『三つの花』にみる女中像

主人公の三姉妹の家庭には、「古くから奉公している」³²⁾ きよという住み込み女中がいる。きよがいつごろ山内家に雇われたのかは記されていない。が、山内家の主婦・康子が新婚のころから、すなわち明治末より、少なくとも10数年以上は働いているものと思われる。年齢はおそらく20代後半から30歳前後であろう。

きよは山内夫妻のことを“旦那様”“奥様”(三姉妹との会話では“父様”“母様”)と呼び、姉妹については、長女の幾代を“大お嬢様”，次女のみどりを“中お嬢様”，末っ子の幸子を“小お嬢様”と呼ぶのがならわしである。いっぽう、山内家の母娘のほうは“きよ”と呼び捨てにしている。

山内家の住宅は中廊下式のいわゆる文化住宅。絨毯を敷いた応接室には籐製の丸卓まるテーブルと椅子が置かれ、父の書斎には机や回転椅子、それに肘掛椅子があることから、洋風の生活スタイルを取り込んで暮らしていることがうかがえる。むろん女中部屋もある。

一人女中のきよは、炊事や洗濯、食事の支度など忙しく立ち働いているが、家事を取り仕切るのはあくまで主婦・康子。「女中のきよも、まめまめしく奥様に手伝って」³³⁾ などからもうかがえるように、きよは康子の指揮監督の下で働いているにすぎない。

父の急死により、山内家の人びとは「遺骨を先祖の墓地の染井に埋める上からも」³⁴⁾ 父の郷里である東京に引き移ることになる。引っ越し先は「きわめて小さな借家」³⁴⁾ で、家具を運ぶ費用が高くつくことから、愛着ある家具はすべて売り払わねばならない。また、女中のきよにも暇を出さねばならなくなった。「お父様の学者肌の生活振りですのたくさんの収入はけっしてなかった一家が、ごく僅かな父上の恩給と、お母様が東京でお勤めをなさる収入で暮してゆかなければならない山内一家にとっては女中はもうぜいたくの至りだった」³⁵⁾ からである。主婦・康子がきよに暇を申し渡す場面から、その一部を引用しておこう。

「きよや、(中略) こんな事情だから、気の毒だけれど、お前に暇を出すより仕方ないのだ

よ……」

お母様は言い憎そうに悲しく話し出された。

「はい」

「きよは、下を向いたきり、これだけ返事をしたけれど、そのまま何も言わずぼろぼろと大粒の涙を流した。

「お前も身体を大事にしてね、又東京へ見物にでもおいでよ、待っているからね……」

お母様もしめった声で優しくいたわれるように言われると、

「はい」

と又言ったきり、ぼろぼろと止め度なくこぼす泪は、やがてまったく幼児のようにしゃくりあげてしまったきよは、とうとうおいおい泣き出してしまった。そして彼女は泪のひまひまに切なげな声音をもらした。

「奥様、後生でございます、一生のお願いでございますから、東京までお供をさせて下さいましよ、あちらまでついて行って、私はどうしてもお家で働かせて戴き度いのですから。御主人がおなくなりになった後のさびしい奥様と、お嬢様達に、このままきよはどうしてもお別れ出来ません……」

きよはこう言ってほんとに、子供のように泣きじゃくるのだった。(中略)

「奥様、私はお給金なぞ、もう少しも戴こうとは思いません。ただ皆様にお別れせずについてまでも御奉公させて戴いて、御一緒に暮らせて戴き度いのでございますから……」

さめざめと搔きくどく様に言うて願うきよのただ一筋に自分達を慕って、いつまでも離れたくない気持ちを思うと、お母様も心からきよを頼もしく思われ、此の上は家族の一人として東京へ一緒に連れていってもいいと心を決めてしまわれた。

「お前がそんなにまで私達を思ってくれるのなら、東京へ一緒に行っておくれ、どんな苦しい生活でも一緒にやって貰うことにしようね」³⁶⁾

康子ときよとの関係は、温情的な主従関係である。1898（明治31）年に施行された明治民法では、それまで家の一員と認められていた奉公人を家族から除外し、法制度のうえでは、奉公人は契約にもとづく近代的な雇用へと切り換えられた。しかし、法律人びとの考え方はただちに変わるわけではない。奉公人を「準家族」と位置づけ、家族的に扱う意識や慣習は根強く残った³⁷⁾。

“主家のためならタダ働きも厭わない”と訴える女中きよの姿，“家族のように接していく”と応える主婦・康子の姿は、日本の美風として描かれており、読者である少女たちの涙をさそったにちがいない。大正末期になってもなお、家族主義的な主従関係を理想とする意識は存在したのである。

東京に移った山内家の人びとは、巣鴨にある借家に落ち着く。8畳と6畳と4畳半の和室に台所があるだけの小さな家である。新居には女中部屋のスペースがないため、きよは玄関先の二畳に寝ることになる。それでもきよは、生計を支えるため働きに出た康子を支え、陰になり日向になりながら³⁸⁾、主家に仕えていく。

3.2 『良人の貞操』にみる女中像

『良人の貞操』の主人公・邦子は結婚5年目の主婦である。現在、彼女の家には女中はいない。新婚時代には女中を置いていたが、「次から次へよからぬ成績だった」³⁹⁾ こともあり、雇うのをやめてしまった。が、女中を置かない理由はそれだけではない。女中を廃して節約し10年間計画でマイホームを建てる、という目標があるからだ。もっとも、家事があまり得意ではない邦子は、不手際を夫からなじられることが多く、それが夫婦ゲンカの原因にもなっている。その一例をあげておこう。

「チェッ、もう九月だのに、白靴履く奴がいるか、茶革の出せよ」

「そう、でもあれ工場で油がこびり付いて、なかなか落ちないんで、まだそのままよ」

邦子は、まごついて、下駄箱を開けて出した茶革の靴は、信也が技師を務めている工場の魚油の揚げ場の流れに濡れた痕が、黒く汚れていた。

「だから、女中でも何でも置けってんだ、自分じゃ靴ひとつ磨いても置けない癖に、莫迦ッ」
信也は、ぷりぷりして白靴を仕方なげに履き、格子戸を逆戻りするほど、ぴしゃっと閉めて門を出た⁴⁰⁾。

この小説の連載が始まった1936(昭和11)年、東京では“女中難”が社会問題となっていた。2年前の1934年、愛国婦人会が女中養成所を開設して、農村出身の女性に都会の女中とし必要な事柄について実地訓練をおこない、就職先の家庭を紹介する事業がスタートしたものの、女中の定着率は低かった。“良い女中が見つからない”という状況は慢性化し、邦子のように女中を廃して自ら家事を行おうとする主婦も少なくなかった。

邦子自身は、幼いころから女中のいる環境に育ち、鎌倉の実家・丸尾家には現在も“ばあやお辰”がいる。以下に引用するのは、正月に実家を訪れた邦子夫婦とお辰との会話である。

そこへ、ばあやお辰がいそいそと飛び出して、邦子の前に膝をつき、

「まあまあ、お揃いで——」と、目をしょぼしょぼさせて、嬉しげに邦子を見上げて、

「どうぞ、今日はごゆっくりなさましょ」

「辰は、いつでも丈夫で、みんな大助かりね」

邦子が優しく言って、持ってきた錦紗の風呂敷包から、反物らしいのを包紙のまま出して、

「はい、お年玉」

「まあ、ほんとに、いつも——」と、心から押戴いて、

「これも、昨年頂戴いたしたのでございますよ、お正月の晴着になりまして——」(中略)

「あら、そんなに大事がらないで、着ておしまいよ」

「そんな、もったいない——」⁴¹⁾

お辰は、末の弟が生まれたときから丸尾家にずっと仕えている女中である。邦子は、母が亡くなってから、このお辰を母代わりにいたわる気持ちだった。とはいうものの、このやりとりにも邦子とお辰は温情的な主従関係、すなわち“お気に入りのお嬢様”と“大好きなばあや”を超えるものではない。

ところで、『良人の貞操』にはもうひとり、準ヒロインとして加代という邦子の女学校時代の親友が登場する。先述のとおり、加代は信也（＝邦子の夫）の従兄弟と結婚し、夫の勤務先のある九州へ引っ越した。3歳になる一女をもうけたものの、夫は事故により急死する。加代夫婦の住まいは社宅で、8畳、6畳、4畳半に台所という間取り。その広いとはいえない家に「栗のような田舎小娘の顔」⁴²⁾をした“ねえや”がいる。この時代にはなお、小学校を卒業した年ごろの少女を子守がてらに雇うということがふつうに行われていた。

未亡人となった加代は、静江を連れて夫の実家がある帯広に渡ったが、ほどなく上京し、邦子夫婦の家に数日のあいだ逗留する。加代は静江のみならず、帯広から“ねえや”も伴ってきた。帰宅した信也に、加代が静江とねえやを紹介する場面をあげておこう。

「そら静ちゃん、小父ちゃまよ——さっきは、お台所でねえやにかまっていて、お迎えしなかったのね」と、静江を信也にむけてお辞儀させる。

「静ちゃん、覚えているかい、この小父さんを」

信也は静江の小さいお河童を撫でた。

そこへ、お皿を運んできたのが、帯広から付いてきたねえや——色の黒い眼のぎょろりとした精悍の気眉宇に溢れた十六、七の少女が、襷をはずして、信也に最敬礼をする。

「この娘、どうしても東京へ付いて来るってきかないんですの、こちらで夜間女学校とかへ通って専検を受けたいっていうんですのよ——偉いでしょ」

加代が笑って少女を紹介した⁴³⁾。

加代は邦子の家の近くにアパートを借り、信也の紹介で事務職員の働き口も得て、静江とねえやとともに新たな生活をスタートさせた。6畳と3畳に台所という間取り。昼間は働く加代に代わってねえやが静江の世話をし、加代が帰宅したのち、ねえやが夜間女学校に通うという暮らしぶりである。

東京では1910年代半ばから、女性を対象とした夜学校が設立されるようになった。とくに1923（大正12）年9月に起こった関東大震災は、昼間は働き夜間に学校へ通いたいという苦学志願の娘たちの増加に拍車をかけ、昭和に入ってからさまざまなタイプの夜間女学校があらわれた。

彼女たちの苦学のおもな目的は、①働きながら女学校程度の教養を身につける、②嫁入り前の準備として裁縫や家事を学びつつ、都会の生活を味わう、③職業上のより高い技術・技能を学んでもっとよい職業につく、④女子専門学校への入学をめざす、の4つに分けられる⁴⁴⁾。

この小説に登場する“ねえや”の場合、めざすは「専検」（専門学校入学者検定試験）。この試験に合格すると、高等女学校卒業と同等として認められ、女子専門学校の受験資格が得られる。それだけに試験のレベルは高く、夜学をへて合格するのはほんの一握りにすぎなかった。

数カ月後、留守中の邦子に代わりねえやが信也の夕食を準備するシーンにが出てくる。「君は加代さんによく仕込まれたから、いいお嫁さんになるね」とほめたところ、ねえやからは、「いいえ、私お嫁になんかゆきません、奥様のお傍に、いつまでも置いて戴いて、専検とるつもりですから！」と斬り返される⁴⁵⁾。それだけの覚悟で臨まないと、専検合格はとうていおぼつかなかったのである。

4. むすびにかえて

『三つの花』と『良人の貞操』いずれにおいても、主婦と女中との関係は、温情的な主従関係として描かれている。これは、筆者の雑誌や新聞の記事を資料とした研究の知見とも一致しており、小説のおもな読者である当時の中流階層の人びとが、温情的な主従関係を理想としていたことがうかがえる。

吉屋信子はこうした社会心理を押さえたうえで、“女中の廃止”“女中の夜学”などその時々特有の事象をとりいれつつ、リアリティある物語を創り上げていった。「大正から昭和にかけて吉屋信子さんほど広く読者を持った人は、婦人作家の中にはかにない」⁴⁶⁾と作家の佐多稲子は述べているが、吉屋が人びとから絶大な支持を得たのは、大衆の心理を読み取ることに優れ、それを日常生活の場面で、具体的にわりやすく描きだすことに長けていたからであろう。

小説に描かれた世界は事実ではない。しかし、フィクションであるがゆえに小説は、“社会をうつしだす鏡”として真実を伝える力を持つ。すでに述べたとおり、女中を描いた小説は非常に多い。今後は、調査の対象となる期間をひろげるとともに、女中を主人公とした小説もとりあげて⁴⁷⁾、近・現代の小説にみる女中像の変遷について探っていきたい、と考えている。

【注および引用文献】

- 1) 初出は『別冊文藝春秋』第278号～第285号、2009年である。
- 2) 著者である中島京子(1964年生まれ)は、25歳から32歳までの7年間、主婦の友社に勤務した経験をもつ。リアルな描写の背景には、『主婦之友』など戦前期の雑誌資料に触れやすい環境にあったことも影響していると思われる。
- 3) 中島京子『小さなうち』文藝春秋社、2009年、22ページ。
- 4) 同上、75ページ。
- 5) 同上、298ページ。
- 6) 同上、32ページ。
- 7) 「第143回直木賞受賞! 中島京子さんに聞く『小さなうち』の原点(2)」新刊JPニュース http://www.sinkan.jp/mews/index_1337.html。
- 8) 近代日本の文学者、とくに男性文学者と女中との関わりについては、奥野健男『ねえやが消えて——演劇的家庭論』河出書房新社、1991年、にくわしい。
- 9) 清水美知子『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社、2006年、3-4ページ。
- 10) 由起しげ子『女中っ子』は1955年左幸子主演で『女中っ子』として映画化され、1972年には森昌子主演『どんぐりっ子』としてリメイクされた。源氏鶏太『青空娘』は1957年に若尾文子主演で公開され、テレビドラマにもなっている。石坂洋次郎『風と樹と空と』は吉永小百合主演の日活映画として1963年に公開された。松本清張『熱い空気』は、1966年と1979年、そして1983年にテレビドラマとして放映された。
- 11) 加藤秀俊『文芸の社会学』PHP研究所(PHP文庫)、1989年、8ページ。〔旧版(単行本)の刊行は1979年〕
- 12) 上野千鶴子は「文学作品は第一級の歴史・民俗資料と言ってよいが、これまで文学は作家主義と作品主義とに阻まれて、そんなふうには読まれてこなかった。わたしの目からは、作家と作品を、時代の文脈から自立させて論じるアプローチ自体が、『ザ文学』なるものを聖域化するディシプリンの陰謀としか見えない」と述べている。『上野千鶴子が文学を社会学する』朝日新聞社、2000年、「あとがき」。
- 13) 母・マサは娘の信子にも、昔ながらの婦徳精神をもって躰けようとした。読書好きの信子にマサが与え

- たのは、忍耐と服従の精神を説いた下田歌子の『家庭教育訓話』であったという。吉武輝子『女人 吉屋信子』文藝春秋社、1982年、52ページ。
- 14) 弥生美術館・内田静枝編『女學生手帖——大正・昭和 乙女らいふ』河出書房新社、2005年、4ページ。
 - 15) 「地の果てまで」は120回の連載用で、四百数十枚の膨大な作品であった。賞金は2000円。当時としての破格の賞であり、賞金は現在の金額にすると1000万円相当という。松本鶴雄編『作家の自伝66 吉屋信子』日本図書センター、1998年、274ページ。
 - 16) 清水澄子「新聞小説と女流文学」、長谷川泉・武田勝彦編『解釈と鑑賞12月臨時増刊号 現代新聞小説事典』（『国文学 解釈と鑑賞』第42巻第15号）1977年。
 - 17) 円本時代の一環である新潮社の現代長編小説全集の一冊に、「吉屋信子集」（「地の果てまで」〔海の極みまで〕収録、1929年刊）が入り、その印税が2万円であったという。『吉屋信子全集 第12巻』朝日新聞社、1976年、555ページ。
 - 18) 吉屋信子のこうした活動は、戦争への協力と見なされても否定できない面があった。
 - 19) 1952（昭和27）年に女流文学賞を受賞したさい、受賞を喜びつつも「それが『安宅家の人々』であったのなら、なほうれし」と日記にしたためたという。吉武輝子、前掲書、291ページ。
 - 20) 吉屋信子『三つの花：吉屋信子少女小説選④』ゆまに書房、2003年、3ページ。
 - 21) 『空の彼方へ』はのちに雑誌「主婦之友」に採用され、1927年4月より連載が始まった。
 - 22) 吉屋信子、前掲書、3ページ。
 - 23) 吉屋信子、前掲書、11ページ。
 - 24) 吉屋信子、前掲書、3ページ。
 - 25) 吉屋信子、前掲書、4ページ。
 - 26) 『吉屋信子全集 第5巻』朝日新聞社、1975年、461ページ。
 - 27) 吉屋信子、前掲書、462ページ。
 - 28) 『吉屋信子全集 第5巻』朝日新聞社、1975年、5-6ページ。
 - 29) 作家・佐多稲子は、『良人の貞操』について次のように述べている。「『良人の貞操』が書かれたとき、私などはこの題名に、はっとしたものだ。当時は、制度としても、貞操は妻に、女だけに関わるものであって、貞操という言葉が夫に、男に結び付くことは社会の通念になかったときである。それをずばりと、“良人の貞操”と現されたことは、吉屋さんの才気とともに、それは勇気であった。多くの女の胸の内に抱えている燃ゆる炎を、ひとつの松明のようにかかげたことであった。それは女をはっとさせただけでなく、男をもおどろかせたかもしれない。「月報1」『吉屋信子全集 第5巻』1975年。
 - 30) 吉屋信子、前掲書、177ページ。
 - 31) 1937年4月3日付「東京日日新聞」は、「1日に初日の幕をあげた全新派の明治座、青年歌舞伎の第一劇場、さては浅草の喜劇大衆劇、映画独占の日本劇場、すべて予想に違わぬ大当たり」と報じている。また、小説のヒロインの名にちなんで「良人の貞操—邦子の唄へる」「良人の貞操—加代の唄へる」という、吉屋信子作詞のレコードが発売され、万を超えるヒットとなった。吉屋のもとへは莫大な印税が入り、彼女は数寄屋造りの豪邸を新築した。
 - 32) 吉屋信子『三つの花：吉屋信子少女小説選④』ゆまに書房、2003年、11ページ。
 - 33) 吉屋信子、前掲書、11ページ。
 - 34) 吉屋信子、前掲書、39ページ。
 - 35) 吉屋信子、前掲書、39ページ。
 - 36) 吉屋信子、前掲書、41-43ページ。
 - 37) 清水美知子、前掲書、20ページ。
 - 38) 幾代の許嫁に対する態度を姉妹の伯母・貞枝がけなしたさい、きよは「奥様、あんな御立派なお優しいお嬢様に何故そんな悪口を仰ります」と顔を真っ赤にして詰め寄るシーンが出てくる。吉屋信子、前掲書、201-202ページ。

- 39) 『吉屋信子全集 第5巻』朝日新聞社, 1975年, 8ページ。
- 40) 吉屋信子, 前掲書, 7ページ。
- 41) 吉屋信子, 前掲書, 51-52ページ。
- 42) 吉屋信子, 前掲書, 24ページ。
- 43) 吉屋信子, 前掲書, 59ページ。
- 44) 清水美知子, 前掲書, 118ページ。
- 45) 吉屋信子, 前掲書, 112ページ。
- 46) 「月報1」『吉屋信子全集 第5巻』1975年。
- 47) 吉屋信子は、女中を主人公とした小説も書いている。「たまの話」『小さな花々』河出書房新社, 2010年（初出は「少女の友」1935年）。

【参考文献】

- ・高木健夫編『新聞小説史年表』国書刊行会, 1996年
- ・田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子—秋灯机の上の幾山河』上, 朝日新聞社, 1999年
- ・田辺聖子『ゆめはるか吉屋信子—秋灯机の上の幾山河』下, 朝日新聞社, 1999年
- ・市古夏生, 菅聡子編『日本女性文学大事典』日本図書センター, 2006年
- ・KAWADE 道の手帖『吉屋信子—黒薔薇の処女たちのために紡いだ夢』河出書房新社, 2008年
- ・中島京子『女中譚』朝日新聞出版, 2009年